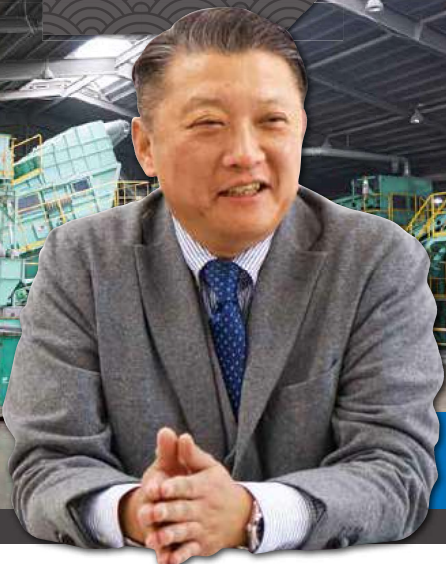


湖国で輝く 企業を訪ねて

株式会社 湖南リサイクルセンター



代表取締役
にしむら たかひろ
西村 忠浩 氏



産業廃棄物の適切処理と高い再資源化率を実現 廃棄から再資源化へ。持続可能な社会構築のために

廃棄物を効率よく「資源」に変える最新設備

気候変動の加速や資源の枯渇が待たなしの課題となり、滋賀県でも持続可能な社会を実現するための取り組みが進んでいます。とくに産業廃棄物の処理と再資源化は、法の規制が強化されるとともに、処理技術が向上しており、なかでも業界トップクラスの技術と設備で注目されるのが、株式会社湖南リサイクルセンターです。

同社は企業や工場などから出る廃棄物を受け入れ、選別・粉碎・圧縮などを行っています。処理する品目は廃プラスチック類から紙、木材、繊維、ゴム、金属、ガラス、陶磁器、コンクリート、がれき類など多岐にわたります。

さらにはただ処理するのではなく、廃棄物の再資源化にもいち早く取り組み、廃プラスチック類を固形燃料(RPF)の原料にしたり、

コンクリートがらをセメント原料として市場へ戻すための中間処理を担っています。

大きな特徴は、廃棄物の種類ごとに専門の建屋が設けられている点で、2020年から2022年にかけて大幅な設備投資を実施。粉碎機・選別機・分散機を更新し、風力選別などの導入で高い選別能力を実現しました。廃棄物を細かく分類することで適正に処理できるのはもちろん、再資源化効率が格段に向上しました。

時流を読み、設備投資する難しさ

会社の設立は2001年。草津に本社を構える近畿環境保全株式会社の石部リサイクルセンターとして誕生し、2005年に現社名で独立・法人化されました。同社代表取締役の西村忠浩氏は、母体である近畿環境保全株式会社の代表も兼務しており、こちらの創業は戦後間もない1962年。忠浩氏の父の裕司氏が個人商店

として京都市内で廃棄物回収の事業を起こしたことに始まります。1975年の法人化を機に滋賀に拠点を移し、母・美代子氏が事業を引き継いだ後、忠浩氏が代表に就任。現在は4つのグループ企業・従業員数約170人という規模へと成長を果たしました。

当初は家族経営で、忠浩氏が大学卒業後すぐに入社したころでも社員は15人前後。回収量が増える年末年始などは「全員総出でほとんど寝ずに分別作業をするのが当たり前だった」と振り返ります。

産業廃棄物については、焼却設備や処理法に関する法規制が次々更新されてきた経緯があり、設備投資に対する判断は極めて難しいものでした。「父母が経営していたころは、情報がすぐに入る時代ではなく、資金を集めて設備をそろえたものの許可が下りなかった、ということもありました。」

方向性を見極めるには時流を読むことが不可欠であり、事業の継続と拡大は決して平坦な道のりではありませんでした。

再資源化と焼却依存からの脱却

2000年代に入り、病気がちだった父・裕司氏に変わって美代子氏とともに忠浩氏が経営に参画するようになったころ、グループ内で再資源化の体制を構築し、焼却依存からの脱却を図りました。湖南リサイクルセンターでは2005年にISO14001認証を取得、2008年にはそれまで外注していた廃木材のチップ加工を内製化し、新工場を竣工しました。

とくに廃プラスチック類などから作られるRPFは、石炭やコークスといった化石燃料の代替えとしてさまざまな産業から高く評価されるようになり、同業者のなかには製造に着手する企業も増えましたが、本格参入は見送ったという忠浩氏。「製造のためには本来廃棄されるものを無理に集めることにもなりかねず、事業の構造として当社向きではない」と考え、原料の供給側にまわること



決めました。あくまでも「排出されたものを適切に処理し、再資源化する」という本来の役割に軸足を置き、それをもとにした経営判断を大切にしているといえます。

ボトムアップ型の提案で次代を拓く

業務の効率化、省力化を図るためにDXも推進しており、社内システムを従来の業界特化型から汎用型へ移行。連携がスムーズになったほか、属人化していた業務の標準化も進みました。顧客に対しても、廃棄物の持ち込み予約システムのほか、顧客が提出する産業廃棄物管理票(マニフェスト)を電子化して一括サポートできる仕組みを構築しています。

人材については20年前から新卒採用を継続して行っており、これは同業界では珍しい取り組みとのこと。働き方改革にも積極的で、女性の育休取得率は100%と高く、小学6年生までの時短勤務制度も導入しています。社内外での研修や学習機会を提供しているのはもちろん、業務の意義や効率化について「それぞれが“自分ごと”として考えられるように」との忠浩氏の思いから、現場からのボトムアップ型で行う改善提案を重視しています。現場主導の働きかけは風通しの良い環境があってこそ、ということもあり、社長から誕生日の直筆メッセージを送っているほか、社長と少人数グループとの懇親会も定期的に開かれており、参加率はほぼ100%。若手社員からも「毎回来しみな行事」という声も聞かれ、フラットで距離の近い関係性が社風となっているようです。



地元小学校を対象とした工場見学の際にも社員の発案によるゲームやクイズが好評で、社会貢献活動に力を入れることで誇りをもって働ける場をつくりたいといえます。「顧客、環境、従業員のよりよい未来を考えることが、持続可能な社会の構築に寄与する力となる」という思いは、一歩ずつ実りを結んでいます。



工場見学会の様子



DATA
本社 / 滋賀県湖南市石部口3丁目6-13
設立 / 平成13年(2001年)
従業員 / 20名(2025年2月時点)
事業内容 / 廃棄物処理業



Corporate policy

- 環境と効率を両立する最新の再資源化フローを構築する。
- 最新の設備とDX化で安心安全な処理を実現する。
- より働きやすい環境を整え、自然や地域社会との共生を深める。

Message

サステナビリティを事業の柱に「めぐりをつなぐ」

現在グループ全体のパーパスとして掲げているのが「めぐりをつなぐ」。サステナビリティは経営の中心であり、全従業員が共有すべき「誇り」でもあります。SDGs、そしてMLGsについては、これまでの取り組みが結果的に合致したかたちとなっており、湖南リサイクルセンターでは「しが生物多様性取組認証2つ星」も取得しています。またダイバーシティの推進を掲げ、障がい者の働く場としてグループ内で企業を設立。高い定着率を実現しています。



ヨシ刈りの様子